



第 31 号
R7.10.23

R7 年度
足高第 3 学年通信

Omoiotake ~思いの丈~

今月の担当は、島田先生です！



「道」

「道」の文字をどのように解釈するでしょうか。「倫理」選択者ならば儒家の人間としてあるべき道、あるいは道家のいう自ずからある「タオ」と捉えるかもしれませんし、プロレスファンであれば、アントニオ猪木の引退スピーチの「道」を連想するでしょう。

この道を行けば どうなるものか 危ぶむなかれ 危ぶめば道はなし
踏み出せば その一足が道となり その一足が道となる
迷わず行けよ 行けば分かるさ アントニオ猪木

実はあの猪木の有名なスピーチには元ネタがあって、それは清沢哲夫氏という哲学者の『無情断章』という本に納められた「道」という詩でした。

此の道を行けば どうなるのかと危ぶむなかれ 危ぶめば道はなし
ふみ出せば その一足が道となる その一足が道である
わからなくても歩いて行け 行けばわかるよ 清沢哲夫

同じようなことを、「我思うゆえに我あり」で有名な哲学者デカルトもいっています。

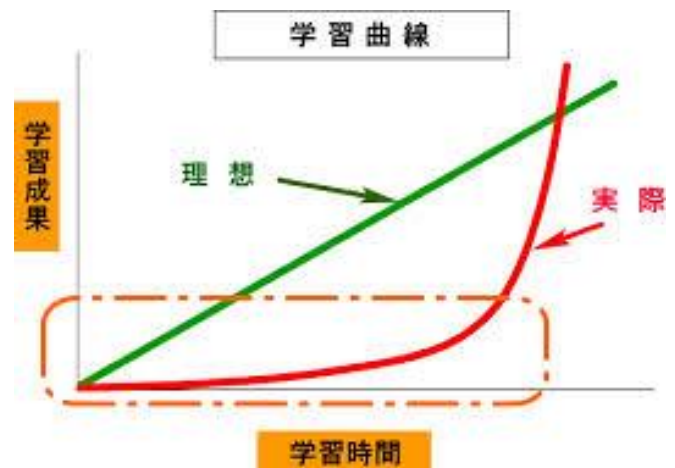
「迷子になった旅人はあっちに行ったりこっちに行ったり右往左往してはならず、ましてや一箇所に留まってはならない。そうではなくて、絶えず同じ方向にできるだけまっすぐに歩まなければならないのであり、少々理由で方向を変えてはならない。そのようにすれば、望む場所ではないとしても、少なくとも森の真ん中よりはましな場所に行き着くことができるからである。」(『方法序説』)

道に迷ってどうしようとウロウロと歩き回っていては、森の中で迷い彷徨い続けるだけです。1つの方向を決めて、そこに突き進まなければ問題は良い方に向かいません。日本の思想家では、夏目漱石が鋭く表現しています。

「もしどこかにこだわりがあるなら、それを踏潰すまで進まなければ駄目ですよ。——もっとも進んだってどう進んで好いか解らないのだから、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。」(『私の個人主義』)

これは、漱石が学習院大学で学生に向けて行った講演の内容です。イギリス留学で苦闘した漱石が、帰国後も持病の胃潰瘍に悩みながら、自己本位という境地を確立した経緯を踏まえて読むと説得力が増します。

さて、思想の世界から現実世界に視点を戻すと、今は受験生にとって正念場の10月。受験勉強を進めながら、授業の予習・復習に加えて課題もある中で、時間をやり繰りしてやっと前の模試の解き直しが終わったらまた週末は模試。そして返ってきた模試の結果は思うように成績が上がっていない。そんな人も少なくないと思います。そして、自分で「これだ!」と決めた志望校を色々な理由をつけて諦めかけていないでしょうか。夏休みに受験勉強を頑張り、2学期には更に時間のやり繰りをして頑張ったのだから、その成果が秋の模試で少くくは出ているはずと思うのは人間の性です。しかし、よく言われているように、勉強の成果は3ヶ月〜6ヶ月後にジワジワと成績に現れてくるものです。現役高3生の学力は、図のようなイメージで努力を続けて冬になってグンと伸びてくる場合も多いです。今は最も苦しい時期ですが、諦めずに自分で進むと決めた「道」を貫きましょう。辛い時には、仲間や担任の先生はじめ先生方もいます。辛いときには相談して下さい。



さて、仏陀(ガウタマ=シッダールタ)が弟子たちに語った話に次のようなものがあります。

「修行者たちよ、あなたたちに筏にたとえられる教えを説きましょう」と話を始めた。筏は渡るためにあるのであって、取っておくためにあるのではないのだと。

たとえば、長い道のりを旅している人の前に、大きな川が現れたとしよう。川のこちら岸は危険で恐ろしく、向こう岸は安全で恐怖もない。何とかして向こう岸に渡らなくてはならない。しかし、向こうへ渡る船も橋もない。そこで、彼は、草、木片、枝、葉を集めて筏を作り、その筏に乗って向こう岸に渡ることが出来た。渡り終えた彼はこう考えた。「この筏はとても私の役に立った。私はこの筏に乗って安全にこちらへ渡ることが出来た。これは大切な筏である。さあ、わたしはこの筏を頭に乗せ、あるいは肩に担いでこれから旅をつづけよう」と。そこでブッダは弟子たちに聞く。「修行者たちよ、あなたたちはそれをどう思うか。このようにする人はその筏についてなすべきことをなす人であろうか」と。弟子たちは「そうではありません」と答える。

ブッダは教える。「どのようにすれば、その人はその筏についてなすべきをなす人であろうか。私はこの筏によって安全に渡ることが出来た。さて、私はこの筏を陸に引き上げて捨て、あるいは水に浸しておいて、次なる場所へ旅をつづけよう。このように考える人が筏についてなすべきことをなす人であろう」。そして、次のように言う。

「あなたたちは、教えといえども捨て去るべきである。いわんや、もろもろの誤った教えについてはなおさらである。」

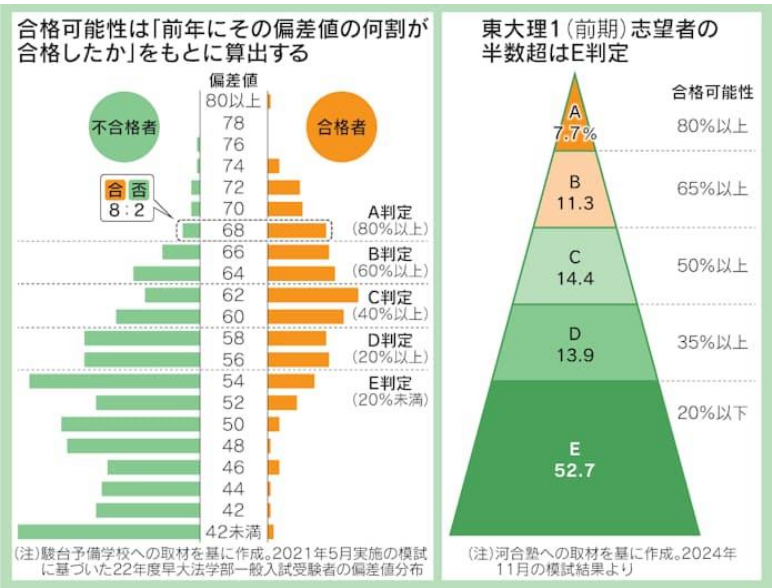
此岸は俗世、彼岸は苦悩を克服した安楽の境地を示し、筏はブッダの教えを示します。悟りの境地に達したならば、方便としてのブッダの教えにこだわってはいけないということです。受験をこの例えに当てはめると、受験勉強は彼岸という大学生活に渡るための筏造りだと思います。大学合格という彼岸に渡りきるためには、受験という激流に対応できる筏を作らなければなりません。しかしながら、大学合格を見事勝ち取ったならば、高校までの学習内容がす

(裏面に続く)

べてと思っははいけません。大学で学ぶ（研究する）内容には、高校までで学んだ理解と異なる部分（特に人文・社会科学系の学問ではありがちです）や、これまで想像もしなかった思考方法や領域がある場合もあります。それを、高校までの一般的な理解に囚われていては視野が狭くなりかねません。今は、全国偏差値という基準を学力の尺度としていますが、大学生になって「自分は偏差値〇〇だ」などと言っていてはまずいですよね。ところで、先ほどの寓話に戻ると、川を渡り終えた後、筏をそのまま持って行かなくとも、筏の木材でその時々に必要なものに作り替えることもできます。受験でいえば、高校時代までに身につけた基礎学力や勉強の方法や集中力などは、将来場面が変わっても応用して役に立つことがあります。

今は丈夫な筏を作る時期＝高校までの学力をしっかりと身につける時期です。この先国家試験にでもチャレンジしない限り、人生で一番勉強に時間を割く貴重な経験をする時期です。物事に精一杯取り組んだ経験は、貴重なものとなるでしょう。

とはいえ、判定がEでは……など、厳しい現実では言い訳をしたくもなります。しかし、現実を客観的に見れば、模試での大学志望者の実に半分以上はE判定です（図参照）。もっと言えば、判定のボーダーラインはベネッセや予備校が合格の目安のために引いたものにすぎません。今の判定が何であろうが、合格できれば良いのです。判定に一喜一憂せずにやるべきことを淡々と進めましょう。12月の3者面談、共通テスト後の担任との面談などで、先生方は進路指導検討会での結果や現状を踏まえてアドバイスをします。アドバイスを真摯に受け入れ、自分の力を過信して無謀なことをしなければ大丈夫です。



夢（目標）を叶える秘訣は、口（くち）に＋（プラス）のことを言うことです。自分の道を拓くため、プラスの（ポジティブな）ことを口にして、あと数か月、「迷わず行けよ！行けば分かるさ！」の精神で乗り切りましょう。頑張ろう、足高生！

最後はニーチェです。

『どこから来たか』ではなく『どこへ行くか』が最も重要で価値あることだ。栄誉は、その点から与えられる。どんな将来を目指しているのか。今を超えてどこまで高くへ行こうとするのか。どの道を切り拓き、何を創造していくとするのか……絶えず進め。より遠くへ。より高みを目指せ。』（『ツァラトゥストラはかく語りき』）

「たまには広々とした自然の中に出てリラックスしよう。自然はすがすがしいばかりでなく、私たちの何の意見も文句も言わないのだから」（『人間的な、あまりに人間的な』）

（文責 島田佐智夫）